

本願成就の信心

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり。無碍の光明は大慈悲なり、この光明すなわち諸仏の智なり。

一心という、まあ一心の華文といわれますが、これを御開山は「廣大無碍の一心」と言われる。「教行信証」というものを通してみると、「廣大無碍の一心を宣布して雑染堪忍の群生を開化したまえり」、こういうように、廣大無碍の一心と言われます。この一心によって雑染堪忍の群生を開化したもう。

天親菩薩は別に雑染堪忍の群生を開化しようと、そういうことを意識して一心をおこされた訳じゃないですけども、そういう事が言えるのは、一心というものが雑染堪忍の群生を開化するような力を持っているからです。だから天親菩薩がおこしたというが、まあおこしたには違いない、天親菩薩がおこされたに違いないです。これは天から降ってきたというようなものじゃない。天親菩薩がおこされたに違いない。けれどもおこした天親よりも一心の方が大きい。おこされた一心というものが、おこした天親よりも大きい。こういう意味を持っている。そうだから、如来に救われると言うよりもですね、天親菩薩がおこされた一心というものによって救われる。だからその一心というもの

がですね、「願生安楽国」と言われる。『願生偈』ですから、詳しく言えばこれは願生の一心ですね。

『歎異抄』には「往生の一心」という言葉が使われておりますけれども、願生の一心です。つまり、一心と言うけど一心の中に願が生きておる。ただ心と言うのではなしに、一心というものの中に、願というものが生きている。願というものは、これはつまり信心の芽でしょう。如来の本願に一心が目覚めるといって、その一心のところに願がですね……。一心というのは如来の本願に対する感動です。だから、感動した心に感動された願がやっぱり生きているんです。それで願生と言う。だからして願生の一心ですね。

「願生」とは、これは天親菩薩の言葉ですけど、実際そこには『大無量寿経』を見てみると、何べんも申しますように本願成就の経文ですね。それを天親菩薩が体験された。だから一心というところに、如来の本願が成就した。本願が成就した一心です。だからこの一心というのは「信心歡喜乃至一念」といわれる一念の信心です。

信心というものは、やっぱり「時」というものがある。「時」というところに、また「人」ということがある。まあ言うとなね、「修多羅真實功德に依って」「一心に帰命」と書いてある。「修多羅真實功德」というのは、名号のことです。これは「時」を超えているんですけれども。「真實功德」と簡単に言っているけれども、もっと詳しく言えば「真如一実の功德」です。「真如」という字は、変わらないという意味です。いつでもあると、こういう意味です。「真實功德」はいつでもあるけれど、それに目を覚ますということはいつでもないんですね。やっぱり「時」というのがここに入ってくる。そこに「人」が生まれてくる。「真實功德」は「人」じゃない。これはもう、「法」であって「人」を超えている。「時」というものを通して「人」が生まれてくる。機というふうなものです。それを一心という言葉で表わす。だから、こういうところに、本願成就の経文というものがあって、「聞其名号信心歡喜乃至一念」と言われる。「一念」というのは「時」がある。その「時」が「一念」です。非常に大事な「時」です。これは『歎異抄』で申しますと、「念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき」とか、ああいう「時」がある。そこに「至

心に回向したまえり」と言われる。名号をもって至心に回向したまえり。名号をもって一心、一念の信心をたまわる。一念の信心をおこした時に回向にあずかる。南無阿弥陀仏の回向にあずかる。南無阿弥陀仏はいつでもあるけれど、それに目を覚ました、その目を覚ました「時」に南無阿弥陀仏の徳の全体をいただく。回向にあずかる。それだからして南無阿弥陀仏の本願が一念の信をおこした時に、南無阿弥陀仏は本願の名号ですが、名号によって本願というものに目を覚ます。それが一念です。その時もうたまわった一念のところに、本願というものが湧き出て来る。湧き出て来るといふようなものです。言ってみれば本願の心というのは地下水だ。地下水に目を覚ました瞬間に、目を覚ましたその心の中に地下水が湧き出て来る。そして、その目を覚ました人を撰取してしまう。こういうような意味になる。「湧き出て来る」ということが「願生彼国即得往生」です。「住不退転」と言われることですね。成就の経文に続いて出てくるんです。

だからして、「願生彼国」ということ、つまり信心が願に目覚める。そうすると、その目覚めた願が一心ということの中に化ける。信が願となる。その願となるところに、確信を得る。どういう確信を得たかというところ、何ものも恐れないというような確信を得る。何ものも恐れない。裏から言うと、何ものも欲しくない。こういうような確信です。ああして欲しい、こうして欲しいというようなことが消えてしまう。それは乞食根性というものが払拭されてですね、そして何ものも恐れず何ものも求めないというような一つの境地が開けてくる。その境地を現生不退ということです。住不退転です。こう言うのですね。そこに現在の救いというものが成り立つ。

これは非常に短い経文ですけども、本願成就の経文というのが『大無量寿経』の中では一番大事なところなんです。その一点に『大無量寿経』の教学が集中されている。それをやっぱり天親菩薩が体験して表わされた。本願成就の経文は長いようだけれども、やっぱり、「我依修多羅真實功德相」というようなところに「聞其名号」ということが出ている。そして「信心歡喜乃至一念、至心に回向したまえり」、回向にあずかる。だから、信というものは単

なる信ではなしに、信そのものの中に願がある。湧出する。湧出して光となる。尽十方無碍光という光になる。そして、おこした人間を撰取る。そしてそこに「住不退転」という位に位づける。凡夫でありながら凡夫を超えるということ。必定の菩薩というような位に位づける。こういうようなことがずうっとね、簡単な言葉だけれども出ている。

実際というと、なかなか話がしにくいと思うんですけど、はじめの一行というものが、やっぱり天親菩薩の体験された本願成就理解です。こういうことが大事ですね。もうそこに尽十方無碍光如来という「光」ですね。だから「光」というものに特に親鸞は注意して、「無碍の光明は大慈悲である」とか、「この光明はすなわち諸仏の智である」とか言って、無碍光の「光」というものに註釈を加えておられます。光り輝く世界というのがここに出てくる。けれどもその裏には、こういう文章は裏に隠れた意味があって、願というものが隠れているでしょう。願に目覚めるというのがそうでしょね。願に目覚めるならば、その願が光となって成就する。「願」というような世界「そういう意味が裏に隠してあるんでしょね」。

やっぱり光と言っても、天親はただ光に酔っているのじゃない。「光」に酔っているんじゃない、「光」というところに如来の満足がある。如来の本願が成就したと。つまり言ってみれば、法蔵菩薩が無碍光如来となった。法蔵菩薩の本願が無碍光如来となった。本願が成就した。そこに阿弥陀仏が生まれてきた。阿弥陀仏の願が満足された。こういうような意味でもって、天親菩薩がたすかったということを表わしてある。一心によって救われたということを表わしている。勝手に救われたというような意味じゃない。天親菩薩の信の一念というものは、実は天親菩薩がたすかったというのは仏自身がたすかった。こういうような意味でもって天親菩薩がたすかったことを表わしてある。こういうような経文ですね。

信は信に違いないけれども、願に目覚めるとその信の中に願が成就して「光」となる、こういう意味になるんですね。ただ信というのでない。本願に対して本願を信ずる、こういうだけじゃなしに、本願に目覚めるとどうなるかと

言うと、本願を信ずるというのではない。信ずる心に本願が成就してくるということです。本願が成就した信心だからして本願を信ずることができるのであって、ただ本願を信ずる、本願を向こうに置いて信ずるというだけではない。それならば、信ぜられる本願は仏の本願だけれども信ずる心は自分から人間の心だということになってしまいます。そうではないんです。信ずる心というものが本願の成就だ。ここが非常に大事なところなんです。まあ、そういうことを表わすために、信心というものに、特に回向という字を使う。「至心に回向したまえり」。本願成就の経文の中で一番大事なのは、「至心回向」ということです。あれが本願成就の文を貫いている。「至心に回向したまえり」、南無阿彌陀仏をもって回向する。

回向というのは、回まてん転てんというような意味がありまして、//何から何に//転ずるということ。その//何から何に//ということがあるから、やはり「向」という字を付ける訳です。回向というのはね。これは//仏から衆生に//転ずる。だからして//仏から衆生へ//と言うんだから、やっぱり「向」という字を使う。回まてん転てん、回かいてん転てんするということの意味があるでしょう。「転ずる」という意味はどういう意味かというと、全然別のものになってしまえば、「転ずる」という訳にはいかないのです。同じもので、じっとしているのが「転ずる」ということでもないんです。そうかと言って全然別のものになってしまうのなら、つまり変化してしまうのなら「回」という字は付かないのです。いわゆる物が変わってしまうのならば。変わることは変わるけれども、自分自身を失くして変わってしまうのではない。自分自身を持ちつつしかも他となる。自分自身を捨ててしまうのではない。自分自身というものを失わずしてしかも他となる。だから他となったままがやっぱり自分自身です。こういうところに「転」という字がある。回転という字がはじめて使われる。ちょうど、煩惱が回転して菩提となる。こういうような場合でも煩惱のままじゃ回転ということは言えないし、また、煩惱を捨ててしまって煩惱と全然別のところから菩提を持つてくるのなら「転」とは言えない。煩惱のままでも「転」とは言えないが、そうかと言って煩惱を断じて、他の所から菩提を輸入してくるということになると

「転」とは言えない。煩惱を消し失わずしてということです。煩惱を消し失わずして、しかも菩提となる、こういうところに回転ということがある。

やっぱり、仏の願というものを消し失わずして衆生となる。衆生の信心となる。だから信と言うけど、単なる信ではない。如来の願心の回転としての信心です。だから信そのものに願がある。満足しているのです。その願の力が信心の上に光り輝いている。こういうような意味があるんです。「願生彼国即得往生」と言って、つまり願に目覚めた時に、さっき言ったように「住不退転」という何も恐れないような確信というような人間ができる。つまり信念が確立するんです。どこへ行っても生きていけるような信念が確立するんです。我々が求道するとか何とかいっても、結局最後は何かといえ、どこでも生きていけるような、何ものにも恐れないような、そういう信念を確立するという事に帰結するんです。聞法と言ってもですね。

ただ大事なのは、「現生不退」という言葉は、往生間違いない、往生が決定したという意味ですけれど、それは「決定した」と思っていることではないんです。往生が決定したということは、決定したと自分で独断して決めているのではないのであって、何かそこに内容がないといけない。こっちが決めるんじゃない。自然に、つまりあんまり頑張らずに現生不退が決まってきたということ。こっちが決めたのなら動くんです。自然に決まってきた。こういうところに現生不退ということがある。信念がそれだけの内容を持つのは、やっぱり信に願が生きておるからです。願に救われたという、願生というものに救われたということを得生と言うんです。「願生彼国即得往生」、得生です。願生というものが得生というものになる。得生というのは現生不退ですね。つまりそれは何かというと、願生をやめて得生にしたのではない。願生の中に得生というものを産み出している。願生が成就して得生になったというんじゃない、もう願のままに満足している。願に救われたこと。願が成就して救われたんじゃない。願のままに救われた。こういうのを得生と言う。そういうような心境がここに「回」と言われている。

何か表面は光り輝くというような世界を述べておられるけど、その内面はやっぱり光に酔っているのではない。願が光り輝く。如来の願が衆生の上に成就して光り輝く。そしてその衆生を救っている。こういうような意味を語ってあるんじゃないか。親鸞がこの一心というものを注目して、ただ天親菩薩がおこしたけれども、そのおこした一心によって天親菩薩自身が人より先に救われる。天親菩薩を救うような力をもっている。なぜなら、その一心は天親におこったけれども如来の心だ。如来の願心が一心として天親に成就したという。つまり如来においては願と言うんですけれど、衆生においては信という。願を信と言う。しかも如来の願と衆生の信とが無関係にある訳ではなしに、願がそのまま成就して信となる。だからその信を回向と言う。願の回向、回向成就です。如来の願というものを我々にいただいたならば信と言うんです。

天親菩薩は「一心帰命尽十方無碍光如来願生安楽国」と言って、一心というものの内容を聞いて願生、願と言った。だからして、願生という願は一心の中に、一心の内容となっていてるんですね。つまり願生というのは、如来の御心、如来因位の心というものに目覚めれば、その目覚めた一心の中に如来の因位の心が生きている。それを願生という。如来の願心が一心の中に生きておる。そして、一心というものをかえって願に帰す。引き上げて。これまで願にぶら下がってあった人間を、願に引き上げていく。願を背負うて立たせる。このような力ですね。信の中に願というものがあって、その信を願に引き立てていく。これまではただ本願にぶら下がってあったような人間を、今度は逆に、本願に生きるというようなところまで信を引き上げていく。そういう力が願にある。

そういうような力を持っているから、一心というものが天親菩薩を救うんです。つまり、如来に救われるというんじゃない。如来に救われるというのは教えについて言うのであって、自覚としてはそうじゃない。信に救われる。如来というのはどこにあるのかと言ったら、信の中に如来に会うんだ。それが願です。信心の中に如来に会うんです。信心の外の向こうの方に如来に会おうじゃない。信心の中に、如来に会おう。如来が信心の中に生まれて、そして

その衆生を呼び返す。本願が信心に生まれて、その信心の衆生を本願に呼び返す。こういうところに、やっぱり信心というものが自覚的な信心になる。また、向こうの方に如来をおいてそれを信ずるという、そういう信心ならば『阿彌陀經』の一心でもいい訳です。別に『淨土論』の一心というものは持ってこなくても、『阿彌陀經』でも一心という。

だから親鸞が「信巻」で、特にこの『願生偈』の一心というものと、如来の三心の願というものの関係を明らかにされたというのは、三心の願が成就して一心になる。三心というのは如来の願心ですから、如来の願心というものが一心の内容なんです。ところが『阿彌陀經』の場合は、如来の願心に対して一心を起こしていくというように一心の外に如来がある訳です。『阿彌陀經』の場合は一心の外に如来があるんですけれど、『願生偈』の場合は一心の中に如来がある。如来が一心となって衆生を如来に呼び返す、と言っています。だから、その一心というのは単なる心じゃない。願が成就した一心である。だからそれだけの力を持っている。天親菩薩を救うだけじゃない。「天親論主は広大無碍の一心を宣布して、あまねく雑染堪忍の群萌を開化したもう」という、雑染堪忍の群生ですね。もうひとつ三心一心の問答で言えば「一切群生海」。一切の群生海を救っている。つまり、皆さん知っておられるように、善導大師は「自身は」と言っております。「我が身は現にこれ罪悪生死」と。我が身というのは、ただ我々が考えた「わし」という意味じゃない、一切群生海です。だからして御開山が明らかにされたのは、法藏菩薩の二種深信なんです。法藏菩薩の機の深信を明らかにしたのが、これがつまり本願の信心ということですね。それは何も矛盾しておる訳じゃないんであって、善導大師が「自身」と言われた。その「自身」というのがそういう意味を持っている。しかし読む人が勝手に「自身」と言ったら「わし」の事だと思っから、それを主観的な反省のように考える。個人的な、「わたしごころ」だと言う。これは日本語では「我」ということも「私」と言うから、ちょっと具合が悪いですけど、

「世尊我一心」と言うのは、「汝一心正念にして直ちに來たれ」という「我―汝」という意味なのです。「汝」という

ものよって呼び覚まされた「我」である。つまり「我」があつて如来を信ずるのではない。如来にふれて「我」が見つかったんです。如来にふれる先に「我」があつて、そして如来を信ずるという、そういう「我」は「わたくし」ですよ。そういうのは宗教意識というものではなくて、やっぱり人間意識だ。人間意識で宗教というものを翻訳して考えるとえらいことになる。とんでもない間違ひになる。いつでも何か、ビクビクしておらなきゃならん。そして見当がつかないね。考えられる発想法が「私」ですから。何を考えてみても「私」に考える。だから永久に自信・確信を持つことはできない。

これはちょっと場所が違うけれども、二十願という経文がありますね。この二十願というのが罪の自覚ということ語っている。これは罪といつても、やっぱり我々が感じた罪じゃないんです。信仰の罪なんです。普通に罪、罪と言うが、信仰でない意識がわかる罪じゃないんです。だから、信仰に至らない、信心をいただかない意識でも、ああ悪かったと思わない者はありはしない。そんな厚かましい人間は世の中にははしない。いくら腹が太いと言ったところで、よくよく胸に手を当てて考えてみたらろくなことをしていないというのは誰でも分かる。信心がなくても分かる。しかし、そんなようなことを言っているんじゃないんです。二十願の罪というのは信心が自覚するような罪を言っているんです。つまり仏智というもので自覚できるような罪なんです。自己反省でわかるような罪ではない。そういうのが二十願です。そこに「自の善根において信を生ずること能わず」ということが書いてある。つまり自信がでないということ。自分で自分を信ずるということができない。自力の信心というのは「わたくしごころ」の信心です。本願を「私」に翻訳した信心です。そういうものは自信を持ってないという。公明正大じゃないんです。胸の中において築き上げたような、自分で整理したような信心ですから公明正大じゃない。「自身は現に罪悪生死の凡夫・曠劫已来流転して」というのは公明正大なんです。逃げも隠れもできないというのが、そういうことですね。

ここに「一切群生海」というのは、法蔵菩薩の自身ですね。それを「一切群生海」という。一切群生海は法蔵菩薩

から言う和自己自身です。そういうような意味があるんです。だから「廣大無碍の一心を宣布して、雑染堪忍の群生を開化したもう」という。こういうような雑染堪忍の群生、一切群生海を一心が救ってくださる。一心というものが一切群生海を救う。だから天親菩薩自身を救うのみでなくて、一切群生海を救う。天親菩薩が「我」と言うのは「わし」という意味じゃない。これはつまり一切衆生の中の一人であるとともに、また一切衆生全体を代表している。それが「親鸞一人」ということです。「親鸞一人」というのは「わし」とか「手前」という意味ではないんです。

宗教というものは「わたしごころ」を破るというようなのが宗教である。いつまでも「わたくしごころ」をよう離れん。それは、私心で生きておる訳です。公の世界の中に。公の中に私心というものを離さずに生きておる。だから何か、謙譲のような、遠慮しているようだけれども、非常に強い我執です。私を捨てるんじゃなく逆に持っている。それで一生ウロウロして、小心翼翼として生きている、そういう関係になるでしょう。そういう自分というものからほっぽり出されたのが、曠劫已来流転しておるといふ自分なんだ。暗い心じゃない、公明正大な心です。

これは仏教の、特別な変わったことを言うんじゃないに、煩惱を起こしたとか業を作っている、生死に流転している、そういうものを人間は「嫌なものだ」と考えている。煩惱悪業と、「悪」と言っている。そういうものは「嫌なものだ」と考えている。けれども煩惱悪業が嫌なものだと考えるのは「わたくしごころ」です。如来が言うのではありません。煩惱も悪業もこれは仏教の言葉で言うと因縁から起こったものです。煩惱が起るのも因縁です。そして「私」が煩惱を起こしているのじゃないんであって、「私」はいらないのです。「私」なくして煩惱は起る。煩惱によって業がつけられる。業が自然に生死を感じる。これは自然にそうなる。だから業道自然と言うんです。自然の法則にしたがって煩惱は起きている。「私」が煩惱を起こしているのじゃない。「私」で解釈するからして、これは「悪い」と考える。いいも悪いもありはしない。好き嫌いがありません。好き嫌いを超えて、よく現実を見なさいという。そこに煩惱によって宿業を起し、宿業によって人生を感じる。生死流転していると。これは好き嫌いを超えた内容なん

です。それがまた「私」の心で見ると、煩惱は嫌だとなる。嫌だとか好きだとかいうのは人間の心でしょう、如来の心じゃないでしょう。煩惱を起こし、業によって流転しているということは妄想じゃないんです。流転も妄想ではできない。妄想で流転するというとはできない。流転しているということは客観的な厳然たる事実でしょう。そこには客観的に伝わる法則がある。因縁の法則がある。因縁の道理にしたがって生死している。生死しているのは因縁の道理だから、生死から救われるのも因縁の道理です。「私」の努力ではない。「私」が勝手に煩惱を起こしたものに「私」でやめられるはずだ。しかし、やめられないでしょう。やめられないということは「私」はいろいろなことにならぬ。「私」がないことになる。煩惱を起こしているのではない、煩惱が起きています。起こす者なくして起きています。作る者なくして作られている。それを因縁というんです。十二因縁と言いますね。作る者なくして作られ、滅する者なくして滅する。自然の道理だ。生死そのものが道理になって成り立っている。そういうのに眼を開くのを仏の心という。好き嫌いをやめて人生を見ようと。

僕のところは清沢先生の絵があるんですが、そこに言葉が書かれてある。「生のみが我じゃない、死もまた我である」、こんな言葉でしたか、霊肉でしたか。人間は霊と肉、精神と肉体を持っている。肉体は肉体、それから精神は霊、魂です。肉体は有限のものなんだ、霊は無限のものなんだ。だからして、その無限のもの、霊も如来から賜わったものなんだ。しかし有限のものも如来から賜わった。霊のみ我にあらず肉体もまた我である。無限のみが我じゃない、肉体もまた賜わった。平等にそれは如来から賜わったものだ。こういうところに清沢満之は自分の信の確立をいう。好き嫌いが無い。肉体を嫌って精神だけを取り込むことがない。精神も賜わったものだけれども肉体も賜わったものだ。だから生死流転も如来に賜わったものだ。浄土に生まれることだけを賜わったんじゃない、生死流転も如来から賜わった。だからして浄土も穢土も併有しておるのが自己です。それは大精神でしょう。生死を背負うて立っておる自己です。そういうことが言われている。

だからして、生死というものは嫌なものだというような考え方、煩惱悪業という嫌なものだとか、暗闇のものだというようにみんな考えている。何とか早くそれと縁を切りたい、こういうように考えておりますわね。それは生死流転じゃない、「私」の解釈した生死流転です。「わたくしごころ」で見た生死流転です。だからして嫌うから逆に嫌われるんです。生死そのもの、煩惱悪業は我々をいじめてはいはしない。嫌うから、それで我々が嫌われるんです。つまり自分の作った幻影で自分が脅かされておるだけです。煩惱生死が我々を苦しめているのじゃない。私心を捨ててしまつたら煩惱生死に安住できる、いただいでいけるんです。それがさっき言った「雑染堪忍の群生を開化する」ということ。仏の心を賜わって、廣大無碍の一心という仏の心に目覚めてみたら、それが生死流転の一切の人類を救う。だから天親菩薩自身を開化するというだけじゃない。この一心は人類を救っているんだ。ただ天親菩薩個人を救っているというものじゃない。それで廣大無碍の一心という。こういうことが言われているんです。

一心が廣大無碍だということは、一心が自分自身に廣大無碍と言ったところでそうは分らないです。「一心に帰命尽十方無碍光如来願生安樂国」と、こう言うでしょう。一心を述べている。一心の外に尽十方無碍光如来があるんじゃないです。一心を述べて帰命尽十方無碍光如来願生安樂国。如来に帰命し、また如来の世界に生まれんと願う、それが一心なんです。だから帰命尽十方無碍光如来願生安樂国は一心の中だ。まあ言ってみれば、尽十方無碍光如来というものが一心の中を開けてくる。一心の外に尽十方無碍光如来というものはないんだ。一心の中に、一心というものを開いてみると、そこに如来の願が光り輝いている。そしてその願は全法界を包む。尽十方無碍光です。全世界を包むような、世界の中に入らないような大きな世界というようなものが、一心の中を開けてくる。だからして尽十方無碍光如来ということは、一心を捨てて尽十方無碍光如来に帰したというのではなしに、一心を開いて尽十方無碍光ということです。つまり尽十方無碍光如来ということは、一心の廣大無碍であることを表わしている。如来の廣大無碍というものは、一心の廣大無碍ということを表わしている。それが目的なんです。だから自分より大きな一心とい

うことを開いてくる。

そんなふうには読まない、ちょっとこの『願生偈』は読めないでしょう。自分の外に広大無碍の一心というものを言ってみても、ただ「わしの信心は広いんだ」ということを言ってみても、広いことはありはしない。それから広大な如来を外において見ておったのでは、如来は広大だけれども如来を信ずる心は狭小だ。小さい心で大きな如来を信ずるといことになるでしょう。それなら一層小さくなる。恐縮してしまっただけです。だからして、そういう小さい心で広大な如来を信ずると言っても、その「広大」ということがよそよそしいわけです。他人事ひとごとみたいになる。そうじゃないんです、一心の中を開いてみれば、そこにですね、本願が光り輝いて成就して全法界を映すんです。

（本稿は、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における昭和五十年七月四日午前の講義の筆録を整理したものである。文責編集部）